



特集

新しい学生支援の取組
未来のエネルギーへの挑戦

教育紹介

研究紹介

イキイキ佐大生

佐賀大学×サガテレビ共同プロジェクト

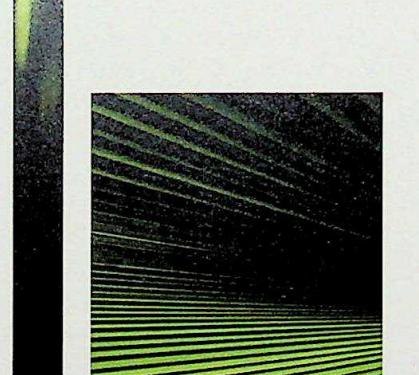
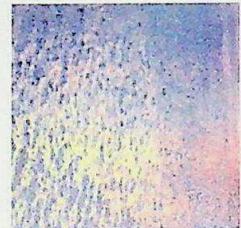
地(知)の拠点整備事業

トピックス

データビジネス創造コンテスト
最優秀賞受賞
ロボットリハ外来スタート!

サークル紹介

お知らせ



学生の悩みを成長に繋げるために

—新しい学生支援の取組—



きない貴重な人生の学びの材料でもあるのです。

佐賀大学は、学生たちが人生の困難や悩みに直面した時、相談や支援の求めに応じて適切かつ迅速に対処できるよう、常に支援体制を整えています。学生たちに、困難や悩みを糧に将来に向かって大きく成長してもらいたいと願っています。

◆多様な支援

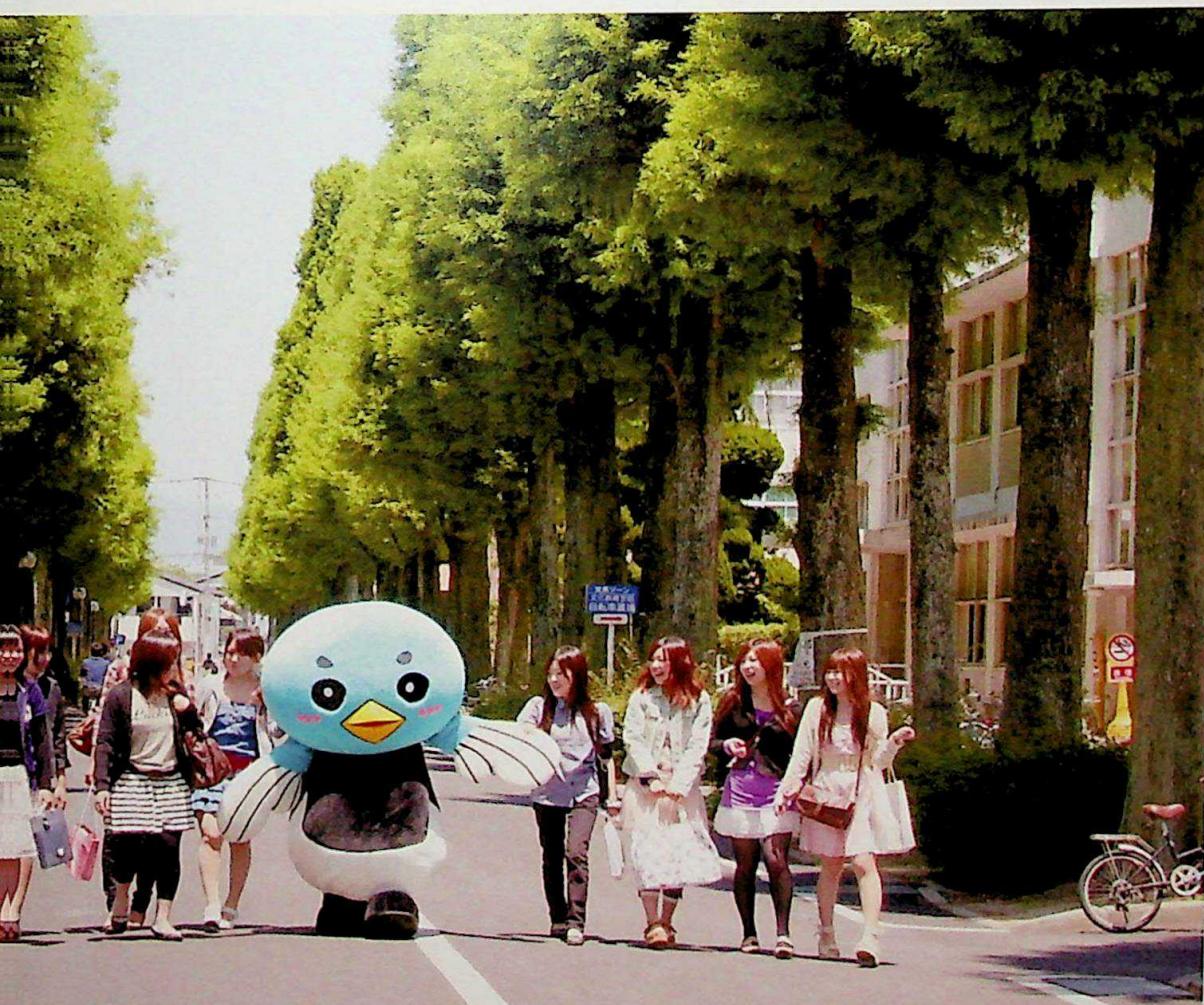
佐賀大学は、「面倒見の良い大学」を目指して教職員一丸となつて学生の支援に取り組んでいます。修学、生活、友人関係など学生生活において困っているときや就職、進学など将来への進路について戸惑い、悩んでいるときに適切なアドバイスや親身な支援など救いの手を差し伸べられるよう、努めています。

◆困難や悩みも糧に

学生は、多くの友人に囲まれながら日々の学生生活を過ごし、また将来への希望に向かって努力をしていることと思います。時には困難や悩みに直面し、心が挫けそうになつたり、心身の病に倒れそうになつたりすることもあるでしょう。しかし、前に立ちはだかる困難や悩みは、人生において決して悪いことばかりではありません。このような困難や悩みは、欠くことのない貴重な人生の学びの材料でもあるのです。

佐賀大学は、学生たちが人生の困難や悩みに直面した時、相談や支援の求めに応じて適切かつ迅速に対処できるよう、常に支援体制を整えています。学生たちに、困難や悩みを糧に将来に向かって大きく成長してもらいたいと願っています。

現在、取り組んでいる学生への支援は、多岐にわたっていますが、特に学習支援、経済支援、就職支援、さらにメンタルヘルスケア、留学生や日本留学生海外派遣の支援、ボランティア



瀬口昌洋
学生支援室長
理事(教育・学生担当)



学生支援室看板設置

現在、身体や心に障害を持つた学生も在籍しています。特に集中的に支援を要する学生に対しては、より充実した支援ができるよう平成25年8月に集中支援部門が設置され、この10月には専任教員が配置されました。また、佐賀大学では、種々の事情で授業出席できなくなつた学生を早期に発見し、支援をするために、10月よりICを行っています。

平成16年に設置された学生支援室は、学生支援体制の中核的組織です。ここには、先に述べた種々の学生支援を体系的に推進するため4つの部門があり、これらの部門が相互に連携と協力をしながら総合的な学生支援を行っています。

や課外活動の支援などに力を入れています。

◆先進的な取組

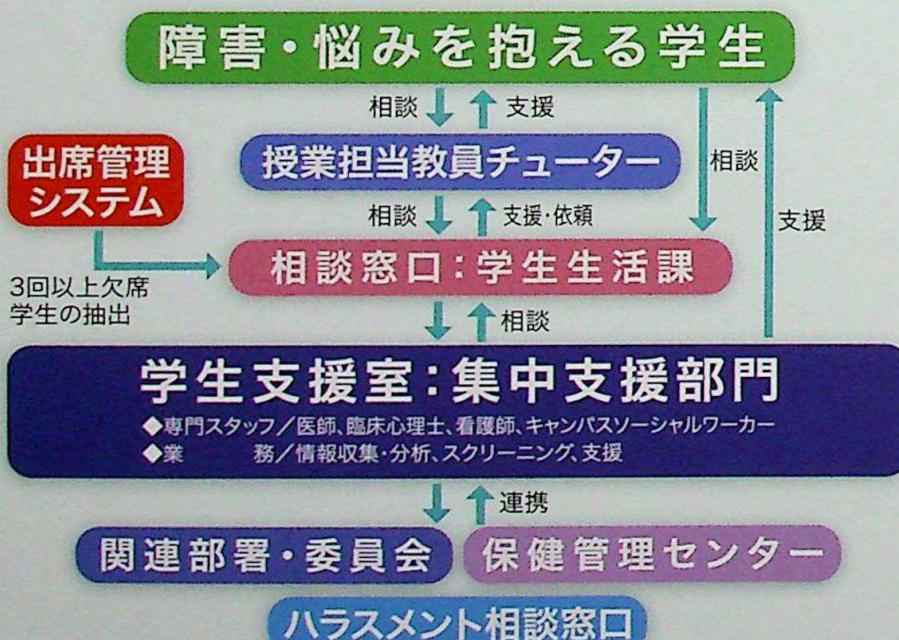
カードを活用した出席管理システムにより、英語などの授業に3回以上欠席した学生を自動的に抽出し、支援する取組を始めました。

学生支援室は、平穏で恵まれた修学環境の中で充実したキャンパスライフを送ることができるよう、悩みを抱えた学生の早期発見、早期支援をモットーに全力を挙げています。

学生支援室組織図



障害・悩みを抱える学生支援図





佐賀大学で開発した衝動タービン

また、平成26年度には、新設した回流水槽を用いる潮流発電装置の開発を工学系研究科と共同でスタートさせました。現在、潮流の往復流れに対応できる案内羽付きの衝動タービンの開発を行っています。

多様な利用・開発研究

センターの利用・開発部門では、海洋にある有用な資源の回収やエネルギー貯蔵、海水淡水化や深層水の利用科学技術など幅広い研究に取り組んでいます。特に、海洋エネルギーから創生された電気エネルギーの水素吸蔵貯蔵に関して、水素吸蔵合金が水素を吸蔵放出する際の充填層の直接可視化や

施しているNEDOの沿岸固定式装置に関する研究開発(平成23年度～平成27年度)でも、センター提案の空気タービンが採用されています。

水素吸蔵合金の有効熱伝導率の解析等の研究等を行っています。また、センターで開発した高圧水素貯蔵タンクの解析プログラムは、水素充填方法の国際標準規格の作成にも利用されています。

センターは今後、海洋温度差、波浪、潮流等の海洋エネルギーから電気エネルギーを創生させる技術の開発と、それに関連する応用研究を行う総合的な国際的研究拠点を目指していきます。



水素吸蔵合金の充填層膨張収縮実験装置



OTEC模型の実演



温度成層の実演



伊万里サテライト



● 海洋温度差発電とは

海洋温度差発電とは、海洋表層の太陽によって暖められた温水と、水深数百メートルの深海の冷水の温度差を利用して発電を行う仕組み。

アンモニアなどの気化しやすい媒体を表層の温水で蒸発させてタービンを回し発電する。蒸発した媒体は深海の冷水により液化し、ふたたび表層の温水によって気化される。



なが た しゅう いち
永 田 修 一
海洋エネルギー研究センター
センター長



未来のエネルギーへの挑戦

海洋再生エネルギーの国際的研究拠点を目指して

全国の海洋エネルギー研究拠点として

海洋エネルギー研究センターは、日本の海洋エネルギーに関する共同利用・共同研究拠点として、全国の大学や研究機関から毎年40件程度の共同研究を受け入れています。この研究を支援するセンターの研究組織は、基幹部門と利用・開発部門に分かれ、専任教員10名と併任教員9名で構成されています。



久米島・50/100kW級海洋温度差実証プラント

また、久米島は、平成26年7月に国の海洋温度差実証フィールドとして認定されるとともに、「久米島モデル」と呼ばれる海洋深層水の複合利用技術の高度化を図るための産業界、大学（佐賀大学、琉球大学他）、地元自治体等が連携した「国際海資源・エネルギー利活用推進コンソーシアム」も設立されました。センターでは、この実証プラントの敷地内に、海洋温度差発電と海洋深層水の複

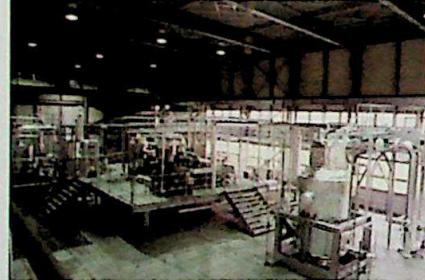
40年の歴史を持つ海洋温度差発電

センターの基幹部門では、主に、海洋温度差発電と波力発電の研究開発に取り組んでいます。

約40年の歴史を持つ海洋温度差発電研究の近年の成果としては、30kWの実験装置を用いて、主要な要素機器の改善を行い、99%以上の純アンモニアを作動流体として、熱源間温度差23°C、温水流量83kg/s、冷水流量11kg/sの条件下で最大正味出力20.5kWを得ました。また、ハイブリッド型海水淡水化装置の開発を行い、効率的に淡水化ができる事を実証しました。現在、海洋温度差発電に関する

(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の2つの大型研究プロジェクトを民間企業と共同で行っています。

基礎研究プロジェクト(平成23年度～平成26年度)では、多段ランキンサイクルシステムや新しいプレート式熱交換器に関する研究開発を行っています。また、実証研究プロジェクト(平成26年度～平成28年度)では、センターが連携協力して、平成25年4月に発電に成功した沖縄県久米島の海洋深層水研究所内の50/100kW海洋温度差発電実証プラントを利用して、NEDO基礎研究プロジェクトで得られた成果の実証研究を行っています。ちなみに、この実証プラントは、現在、実海水のみを用いて発電し、電力に系統連系している世界で唯一の海洋温度差発電システムです。



30kW海洋温度差発電装置



久米島サテライト開所式

合利用に関する研究を目的とした「久米島サテライト」を平成26年10月に開所しました。

平成17年度波力発電開発スタート

平成17年度にスタートした波力発電の開発では、2種類の浮体式装置を開発しています。特に、空気タービンを用いる振動水柱型装置“後ろ曲げダクトブイ”に関しては、高い変換効率を持つ浮体形状と低速化を実現する新型の衝動型空気タービンの開発を行っています。

センターで開発して、世界的に高い評価を受けている衝動型空気タービンを搭載した装置模型(長さ2.5m、幅2.3m)の発電実験では、最大発電効率約30%という従来にない高効率を得ることができ、同じ模型を用いた実海域実験も博多湾で実施しました。また、民間企業と共同で実



波力発電装置の博多湾での実海域実験

地域における学びの機会

経済学部では、2年次後学期からすべての学生が専門ゼミに所属し、卒業までの2年間半、各教員の専門分野について勉強しています。私のゼミでは、経済地理学、地域経済学について、2年次には文献の輪読を通じて基礎的な知識の習得を、3年次にはそれに加えグループ研究を、4年次にはそれまでの集大成として各自テーマを設定し卒業論文の作成を行っています。ここでは今年の3年生が行ってきたグループ研究の取組について紹介します。

今年の3年生は、小城市的協力のもと「合併自治体における公共施設の利



牛津総合公園の視察



小城市役所でのワークショップ

元の一環でもあり、自治体との協力により、地域が抱える課題を題材に、学生が調査、研究および対策の検討を行い、その成果を地域に還元することを目指し取り組んでいます。

地域が抱える現実の課題をテーマにする以上、先行研究や先進事例について文献を読んだり、統計データをパソコンで調べたりといった、机上調査のみならず、現場に足を運び、生の実態を見たり、話を聞いたりといった実地調査が重要となります。実際、学生たちは地域住民の声を聞くため、施設利用者へのインタビューを行ったり、近隣の小学校において小学生とのワークショップを行ったり、また当該地域以外で先進的な取組をしている現場に出かけて調査を行ったりと、大学の外での活動も積極的に進めてきました。その際、小城市役所職員の方々をはじめ地域の方々には、貴重なアドバイスやフィードバックしていただきなど、学生たちを温かく受け入れ、一緒に教育していただき、大変感謝しています。

この調査は、佐賀大学が平成25年度からすすめている「地(知)の拠点整備事業」のプロジェクト「地域との連携による地域経済政策に関する学生主体の調査研究と成果の地域社会への還

こうした地域における学びの機会は、学生たちが今後勉強をすすめていくうえでのみならず、将来さまざまな地域において社会生活を送るうえでも、大変意義ある貴重な経験となつたのではないかと考えます。



小城市長への報告会

牛津小学校でのワークショップ



戸 田 順一郎
経済学部経済学講座
准教授

自然資源の利用管理を 生活組織から考える

私の専門分野は、村落社会学、環境社会学と呼ばれる分野であり、社会学（ときには民俗学）の視点から、自然資源の利用管理や自然と人間の関わりに関する諸問題を研究しています。例えば、最近さまざまなメディアや政策のなかで使われるようになった「コモンズ」（みんなのものとしての自然や資源

の利用管理の仕組みについての議論）という考え方は、これらの分野でとりあげられてきた研究の一つです。

社会学といえば、理論研究や統計資料の分析、マスメディアの分析などを主な研究手段とする人もいますが、私の場合は、コースのほかの先生方と同様、実際の現場（農村や山村など）に出て行って、そこで生活をしている人たちにとって何が問題であるか、何が生じているか、対処するための（これまでしてきた）社会的な仕組みはどのようなものか、集落や集団・組織、農業生産と生活、そして地域文化などの歴史や現在について、様々なデータをと

ると同時に、時間をかけて聞き取りをすることが調査の中心になります。二回的なデータの分析やアンケートだけではわからないような生活の現場からの声をなんとかつかみとりたいと考えています。

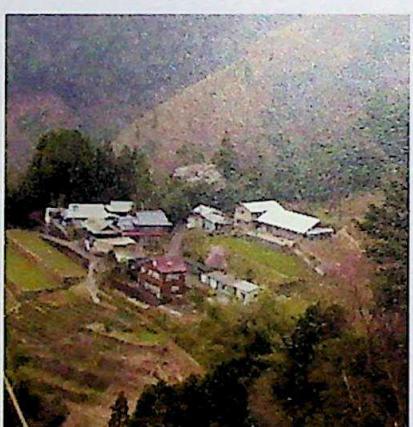
ラオスの調査風景

佐賀大学に赴任してからこれまでに、阿蘇の草原保全に関する社会システムや地元と政策の間のすれ違いの原因、九州山地の山村の社会組織、獣害への対処などについて研究してきました。その中の一つである獣害の研究を紹介すると、同じ九州の農山村であつても、県によってイノシシの獣害に対する地元の対応は大きく異なっています。例えば福岡・長崎・佐賀などの北部九州の山村では、増加し続けるイノシシの被害に対して、電気牧柵やワイヤーメッシュを張り巡らせたり、行政の側でも一斉駆除（実際には追い払い）や講習会などを開催したりしていますが、依然として被害は深刻です。一方、宮崎や鹿児島の山村では、イノシシは

現在取り組んでいるテーマは、①林業不振や過疎高齢化の中で問題となってきた日本の山や森の管理について、②急激に変化しつつある東南アジアの農村の土地利用の変遷と社会システムとの関係についてなどです。

いるのですが、地元の人々に話を聞くと、北部九州ほどにイノシシに関する拒否感はなく被害総額も相対的には高くありません。その要因として考えられることは、生産している農作物や地理的条件や気候、生態系などもありますが、歴史を振り返ってみると、北部九州では1970年代までの数十年間、イノシシが絶滅していた歴史があり、その間に狩猟やイノシシ食の伝統も消えしまったと考えられます。また、人間が山で作業する日数なども大きく異なります。このような、人間とイノシシの関係の違いが、被害の大きさや被害意識、地元の対策の違いにもあらわれてきます。とするなら、イノシシの防除政策も、地域の実情をふまえたものでなければなりません。

現在取り組んでいるテーマは、①林業不振や過疎高齢化の中で問題となってきた日本の山や森の管理について、②急激に変化しつつある東南アジアの農村の土地利用の変遷と社会システムとの関係についてなどです。



宮崎県の調査地域



農学部地域社会開発学講座
准教授



全国的にも珍しい学生主体のNPO法人 佐賀大学スーパー・ネット

こ こには、NPO法人佐賀大学スーパー・ネット(以下、スーパー・ネット)田中慶陽です！



大学会館での分別の様子

みなさん、スーパー・ネットという団体をご存知ですか？私たちは佐賀大学生を中心に平成15年3月に設立され、今年で活動12年目を迎える、全国的にも珍しい学生主体のNPO法人です。

「環境・地域・人に貢献する心」を理念に日々活動に励んでいます。現在は「環境」「農業」「教育」の3分野で多くの学生が社会貢献活動に参加することを目指しています。環境分野では佐賀大学内で捨てられた約40万本のペットボトルをキャップとボトル本体に分別する活動を中心に行ってています。集めたキャップは換金し、ワクチン購入代としてユニセフに寄付を行っています。他にも大学会館やかささぎホールでの分別呼びかけ活動、学内にキャップ専用回収ボックスの設置、県内の環境イベントなどに出展するなど学

内外問わず活動を行い、多くの人に環境について知つてもらうことを目指しています。上記三事業以外にも、佐賀大学学内でのジョギング大会など、継続したイベントの主催も行っています。

スーパー・ネットはNPOであるため、NPO法に則った運営をしなければなりません。例えば、総会(会社



田 中 慶 陽
NPO法人佐賀大学スーパー・ネット代表
経済学部経営・法律課程4年



稻刈りにて

でいう株主総会)の開催や、県庁や法務局への活動報告や会計処理など大変な事務作業もすべて学生で行います。

平成25年には活動が評価され、学生ボランティア助成事業表彰((財)学生サポートセンター)や3度目の佐賀大学学長表彰などを受賞することができました！

私はスーパー・ネットでの活動を通して、多くの経験をしてきました。活動の一つ一つが地域や社会のために



学長表彰



財団法人学生ボランティア表彰授賞式

なっていることを実感できました。また、人とのコミュニケーション、積極性、チームで協力する力など、社会に出たときに必ずスーパー・ネットでの経験が活きてくると思います。これからも佐賀大学の学生団体と言えば「スーパー・ネット」と言われるよう活動を継続していきます！



楽しみながらペットボトルの分別♪

自然を通じて人を繋ぐ Green-Nexus



Green-Nexusメンバー

皆さんこんにちは。Green-Nexus代表の有松です。Green-Nexusは、私が今年5月に立ち上げた新しい団体であり、主に自然環境保全、生態系保全を中心としたボランティア活動をしています。また佐賀大学で唯一生き物を取り扱っている団体でもあります。一般的な



大学祭に参加

ボランティア団体と比べ、独自性を追求した団体であると言っても良いでしょう。現在総員28名。7月から「日本ボランティアクラブむつごろう」様と協同で毎月第3日曜日に地域のクリーク清掃を行っています。(平成26年8月18日西日本新聞、平成26年8月27日佐賀新聞掲載)また10月から農学部応用生物学科の徳田誠准教授にお手伝いいただき、生態系調査にも拍車をかけています。

今年は大学祭にも挑戦し、「がばイベント」「バザー店」両方に参加しました。特に「がばイベント」では本庄キャンパス内のクリークに生息する生き物の展示、自然産物を利用して作る松ぼっくりアートと、Green-Nexusならではの自然を根底に据えた出し物を行いました。2日で1,075名の方々にお越しいただいたので、来年も実施する予定です。11月からは使い捨てカイロの回収活動を実施。使い捨てカイロで川の水の浄化に



ありまつともあき
有松知晃
Green-Nexus代表
農学部生命機能科学科1年

貢献します。同時に、近年佐賀で初確認された希少種オヒキコウモリの分布域調査の依頼をいただき、現在調査中です。12月半ばからはクリークで採れる生き物を展示する「街なかクリーク水族館」を佐賀駅近くのとある店舗で開催予定です。

Green-Nexusとは「Green=縁=自然」に関わる活動を通して、大学や地域社会と「Nexus=繋がり」を持ち、貢献していく団体にするという志のもと、命名しました。今後はより地域社会の人々との繋がりを深めていく活動を展開していくと考えております。

お力を貸しくださる方、団体様、大歓迎です。興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、是非こちらまでご連絡いただければ幸いです。

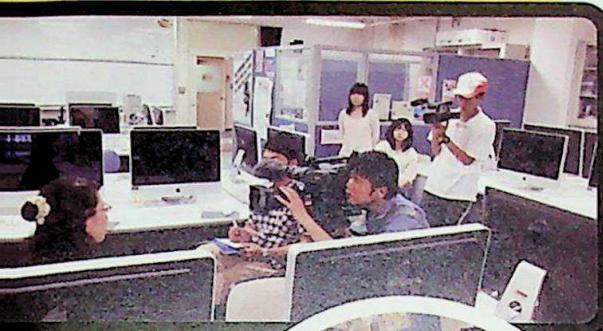


■お問い合わせ先

メールアドレス:
At.Nexus-ty@softbank.ne.jp

Facebookページ:
f Green-Nexus

佐賀大学を撮る!



みなみ かわ
南川 みづき
経済学部経営学科1年

現在進めているのは、東北のドキュメンタリー映像を作るために、実際に東北へ取材に行った学生たちを紹介するものです。今回は自分たちで撮った映像ではなく、実際に取材を行った方々の映像をもとに、構成を考えていきました。どのように作ればいいのか分からなかったのですが、色々な人に協力をしてもらってなんとか原稿を作り、それをサガテレビの方と何度も修正しました。慣れないことでとても大変な作業ですが、とても貴重な経験ができると思います。

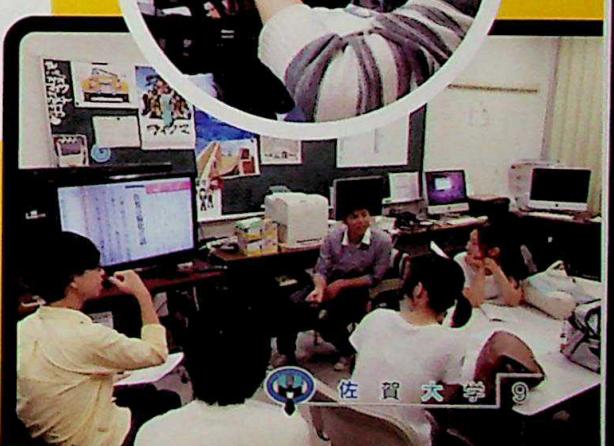
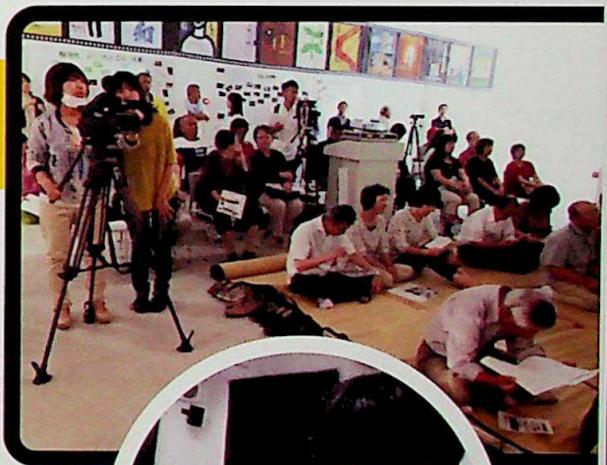
不定期ですが、サガテレビのスーパーNEWSで放映されますので、是非見てみてください。(南川)

「佐賀大学×サガテレビ共同プロジェクト」は平成26年5月にスタートしました。プロジェクトの内容は、学生が佐賀大に焦点をあてた番組を2カ月に1本のペースで制作していくというものです。テレビ番組制作というかつてない体験を前に、ワクワクしていたのを覚えています。

番組制作の流れやカメラの使い方などほとんど何も知らない私たちは、まず準備期間として番組制作の裏側を知るべくサガテレビさんに見学へ訪ねたり、プロのカメラマンから実演指導を受けたりと撮影の基本を学んでいきました。

初の撮影は、佐賀大生が描いたアニメ「鍋島化け猫騒動」と琵琶との共演「ピワニメーション」に関するものでした。サガテレビさんが撮影している様子を観察しながら無我夢中で撮影に取り組みました。実際に撮れた映像はひどいものばかりでしたが(笑)、現場で撮る経験は私たちを大きく成長させたように思えます。

3回目になり、いよいよ学生が主体となって番組制作に挑戦することになりました。その時に番組のディレクターに選ばれたのが私でした。番組の内容は、佐賀市内で街づくりに取り組むサークル「ルート佐大」について紹介する趣旨のものでした。放送まで2週間と短い期間でしたが、現地での取材・撮影、その後サガテレビさんと連携をとりながら徹夜で映像の編集をおこないました。放送を終えて反省点も多く残りましたが、次の制作に活かしていきたいと思います。(椎葉)



地知の拠点

地(知)の拠点整備事業
佐賀大学と西九州大学は、佐賀県全域をキャンパスと位置付け、学生・教職員による実践的な教育研究を通して、地(佐賀県域)と知(教育研究)のアクティベーションを進めることで、佐賀の地における知の拠点としての機能強化を実現するため、両大学の教育・研究シーズを集約し、佐賀県域が抱える地域課題

題としての中心市街地・離島・山間地域の活性化、地域産業の振興とコミュニティの再生、地域医療・保健・福祉の向上、子どもの教育支援、高齢者の健康改善および地域環境の保全等の解決に向けた12の教育研究プロジェクトを推進しています。(文部科学省平成25年度採択事業)
このプロジェクトでの左賀大学の取組を紹介します。

地域の活性化に取り組む教育

～地（知）の拠点整備事業とインターフェース～



コンサート会場

私は教養教育のインター
フェース「地域創成学プログラム
ム」を受講しています。このプロ
グラムでは、40名の受講生が「町
班」と「村班」に分かれて、地域の
空洞化問題や地域コミュニティ
の活性化を課題にして、県内各
調査研究・イベント支援のプロデ
などを学んでいます。

の活性化を課題にして、県内各地での調査研究・イベント支援のプロデュースなどを学んでいます。

相知町の「蕨野の棚田」で行われる「ふるさとの灯りコンサート」イベントの企画と運営に関わりました。蕨野の棚田は国的重要文化的景観にも選定され、佐賀大学も農学部を中心に援農や教育ファームとして支援を行ってきたところです。私たちは、NPO法人蕨野の棚田を守ろう会や村の住民と協力して、平成25年に実施できなかつたライトアップコンサートの復活に取り組みました。

石積み棚田のライトアップと竹灯籠



会場準備

の舞台演出、出演して頂けるアーティストとの交渉、広報活動等に取り組みました。アーティストは、棚田の景観や雰囲気、そして野外コンサートを意識して選びました。広報用のポスターは、デザインを学んでいる友人の協力を得て作成しました。一番大変だったのは、竹灯籠づくりでした。蕨野や大学で、土日や休み時間を使って、みんなでノコギリ・電気ドリルを使つての格闘でした。コンサート当日は、台風接近のため開演間近まで開催が危ぶまれましたが、会場を公民館に移して開催しました。みんなで頑張って作つた竹灯籠は、吉野ヶ里で行われた「山茶花園での夜会コンサート」に活用されたことが救いでした。

村班は、次に、佐賀市大和町松梅で、空家を活用した中山間地域の活性化に取り組む予定です。



棚田発見塾のメンバー



文化教育学部
美術・工芸課程2年



データビジネス創造コンテスト 最優秀賞受賞



スマートフォン向けアプリケーション

11月8日に慶應義塾大学三田キャンパスにおいて第2回データビジネス創造コンテストDigital Innovators Grand Prix(DIG)の本選が開催され、本学のチーム「Team Saggest」が最優秀賞を受賞することができました。

このコンテストはデジタル・ネイティブ世代である高校生や大学生を対象に、自治体が公開するオープンデータやSNSなどのソーシャルデータを広く深く発掘することで、新たな知の抽出や価値の創造を行なうコンテストです。今年は2県3市の自治体から9つの政策課題が提示され、東京大学や慶應義塾大学の学生も参加し白熱したプレゼンテーションを行いました。

本チームのメンバーは全員が理工学部(物理科・機能物質化・都市工)を卒業し、デジタル表現技術者養成プログラムの修了生でもあり、これまでにもコンテンツ制作に取り組んできました。現在は教育学研究科・工学系研究科に在籍し研究を行っています。

今回、本チームは佐賀県から提示された「救急医療の改善」というテーマに取り組み、佐賀県をはじめ、官公庁・民間のオープンデータに加え、唐津市消防署や聴覚障害者サポートセンターなどのヒアリングを行い、幅広い視点から情報収集・分析に取り組みました。そこから得られた結論として、佐賀県では未導入である全年齢向け医療相談窓口の#7119の導入と、お薬手帳の有効活用が緊急搬送時間短縮につながることが導きだされました。

さらに、上記の政策提案を具体化する方法として様々な案を検討した結果、現在の佐賀県のポテンシャルを活かし、今後の社会へ繋がるものとするため、スマートフォン向けのアプリケーションにたどり着き、実際にiPhone用アプリケーションを開発しました。

実際の救急医療の現場には、まだたくさんの課題が存在し、さらに新しい問題も出てきており、搬送平均時間は年々伸びています。この政策提言によって、救急救命士が日々入力している搬送データは今回の分析の中核をなすデータとなり、貴重かつ有用性の高いデータであることも証明出来ました。また、アプリケーションの利用により、佐賀県の平均搬送時間が短縮され、全国の救急医療がさらに最適化され1人でも多くの命が助かることになればと思います。



授賞式にて。Team Saggestの(写真右から)溝上智奈美さん(工学系研究科2年)、古川将大さん(教育学研究科2年)、糸山ゆうさん(教育学研究科1年)

『ロボットリハ外来』

(ロボットリハビリテーション)スタート!



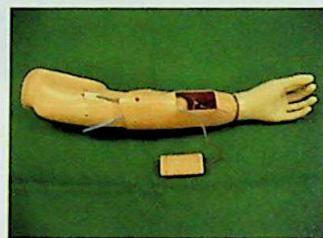
医学部附属病院リハビリテーション科では、平成13年より上肢切断者に対して筋電義手のリハビリテーション(リハ)を全国に先駆けて行ってきました。この筋電義手は、筋肉が収縮する際に発生する微弱な電流(筋電シグナル)を利用してスイッチを作動させ、上肢を欠損・切断した方が本人の意思で物を「つかむ」、「離す」という動作を可能にするもので、現在では成人の方だけではなく小児の方も使用されています。

また、平成23年からはロボットスーツHALを導入し、その後はHondaアシスト、NESS200H、ウォークエイドなどのロボットも加わり、多くのロボットを活用してのリハが可能となりました。これらのロボットも身体から発生される生体電位を読み取り障害のある手足の動きを補助したり、筋肉に刺激を与えてたりする仕組みになっており、これまで難しかったリハの質を高めたり、正確で十分なリハ量を確保することができるようになりました。全国で臨床使用が開始されたばかりのトヨタのパートナーロボットによるリハも、平成26年度内に九州では初めて開始される予定です。これらのロボットリハに、磁気刺激療法やボツリヌス療法などといった新しい治療法を併用することで効果増も期待しており、このような先進的なリハを行うことで、脳卒中や運動器疾患などで生じた麻痺のよりよい改善を目指しています。

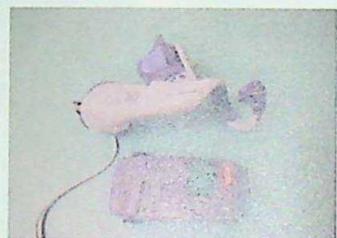
このように多くのロボットを備えてリハを行っている施設は現時点では他にはあまりなく、そこで多種のロボットを用いた質の高いリハ治療を多くの方に提供したいと考え、平成26年10月1日より、リハビリテーション科外来の中の特殊外来として『ロボットリハ外来』を標榜してのリハ治療をスタートいたしました。ロボットリハ治療を受けられたい方には、まずはロボットリハ外来に予約していただき、診察によりロボットリハの適応となった場合は、外来にて専任の理学療法士がロボットリハを一定期間行うことになります。

今後は、ロボットリハによる新しいリハの可能性を見出しながら、よりよいリハ医療を皆様に提供していきたいと思っております。

ロボットリハビリ(上肢)



筋電義手



NESS H200(上肢用)

ロボットリハビリ(下肢)



HAL



Hondaアシスト



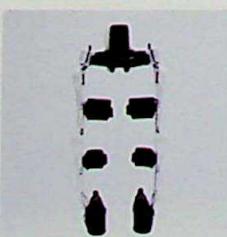
NESS L300 WalkAide

TOYOTAパートナーロボット
歩行練習アシスト

歩行解析

ロボットスーツHAL

- 下肢の主要な筋に電極を貼付し、動作時に発生する生体電位信号をもとに、股・膝関節のパワーユニットを制御することで起立・歩行動作を支援するロボット
- 適用対象者：脳血管疾患、脳性まひ、脊髄損傷など



関節角度を測定する角度センサーや重心の位置を検出する床反力センサーを内蔵

SCS 学生地域交流の会(鍋島キャンパス)



代表

ふるかわ ゆうたろう
古川 祐太朗

医学部医学科4年



こんにちは。私たち、SCSは平成25年12月より鍋島キャンパスを中心に活動している地域交流サークルです。地域と医学部生を絡めた世代を超えた交流を行い、将来的に地域コミュニティに携わる医療人としての素養や人と人との繋がりの濃い地域を構築することを目的としています。佐賀に来たとき、最初に思ったことは学生が内向的で、地域との異世代交流があまりないということでした。そこで、より良い地域づくりのために私はSCSを立ち上げ、積極的に地域に出ていくことにしました。私たちの活動の1つで医学部の臨床実習にも組み込まれた、高齢者の健康改善部門では、高齢者同士の見守り運動の一環である高齢者サロンに医学部生が訪れて、認知症予防講座やさまざまな医療関連講座を提供することで健康改善、介護予防に携わっています。またお話をしながら、お医者さんには聞けないけど、医学部生になら聞けるといったお悩み相談も行っております。一つ一つの出会いが大切で医療人としての自覚を“今”私たちに芽生えさせている気がします。



トライアスロン部(本庄キャンパス)



部長

もり森 あすか
明日花

農学部生物環境科学科3年



こんにちは、トライアスロン部です。私達は、部員5名、マネージャー1名の計6名で活動しています。休日は社会人の方たちと練習したり、伴走活動をやったりしています。トライアスロンというスポーツはご存知ですか？トライアスロンは、海を泳いで、自転車で長い距離を走って、最後に自分の足で長い距離を走るという世界で最も過酷なスポーツです。自己紹介で「趣味でトライアスロンやっているんですよ。」なんていうと必ず「すごいですね。」と言われます。

僕たちトライアスロン部はそんなすごいことを成し遂げる為に日々練習に打ち込んでいます。私たちの目標は、インターラッジに出場することです。九州のインターラッジの出場枠が8名で、ここだけの話、他の競技と比べると、まだどの大学もトライアスロンという競技に力をいれてないし、選手人口もまだまだ小規模なので比較的出場するチャンスが大きいと思っています(笑)。しかし、ただがむしゃらに練習するのではなく、トライアスロンというスポーツを楽しむということを忘れず、各個人の目標を尊重するような集団を目指しています。



2015 A HAPPY NEW YEAR

人生に差がつく4年間。

そのサガ、サガ大。

学部生就職率
97.6%

国家試験現役合格率 全国
No.1

教員就職率
九州の国立大学教員就職率の中で
No.1

2016年設置予定
芸術学部
教育学部
※設置認可申請準備中

JR博多駅→JR佐賀駅
約40分
アクセスが良い
キャンバス！

国立総合大学に!
美術館
国立の総合大学では
全国初！



佐賀大学

各種資料請求及びお問合せ 佐賀大学/学務部入試課 (TEL: 0952-8502 佐賀市本庄町1番地)
TEL: 0952-28-8178 E-mail: nyuhi@mail.admin.saga-u.ac.jp

佐賀大

校園

国立大学法人佐賀大学の役職員の報酬・給与等について(概要)

国立大学法人佐賀大学では、役員の報酬等及び職員の給与の水準を公表しております。公表内容につきましては、「佐賀大学ホームページhttp://www.saga-u.ac.jp」をご覧いただか、または、人事課給与主担当で文書資料を用意しておりますので、ご連絡ください。(TEL:0952-28-8125) なお、公表内容の概要は次のとおりです。

1. 国家公務員及び他の国立大学法人等との給与水準(年額)の比較指標(平成25年度)

職員の区分	対国家公務員 ^{※1}	対他の国立大学法人等 ^{※2}
事務・技術職員	81.5	91.8
医療職員(病院看護師)	104.2	97.7
教育職員(大学教員)	(参考) 93.9	94.8

※1 国家公務員の給与水準を100として算出

※2 すべての国立大学法人を一つの法人とみなした場合の給与水準を100として算出

2. 総人件費について

区分	当年度 (平成25年度)	前年度 (平成24年度)	比較 増△減	中期目標期間開始時 (平成23年度)からの増△減
給与・報酬等支給総額 (A)	千円 9,780,053	千円 10,045,393	千円 △ 265,340 (△ 2.6%)	千円 △ 922,978 (△ 8.6%)
退職手当支給額 (B)	千円 1,124,253	千円 1,225,751	千円 △ 101,498 (△ 8.3%)	千円 430,476 (62.1%)
非常勤役職員等給与 (C)	千円 4,248,862	千円 3,841,880	千円 406,982 (10.6%)	千円 1,209,874 (39.8%)
福利厚生費 (D)	千円 1,869,304	千円 1,773,109	千円 96,195 (5.4%)	千円 208,182 (12.5%)
最広義人件費 (A+B+C+D)	千円 17,022,472	千円 16,886,133	千円 136,339 (0.8%)	千円 925,554 (5.8%)

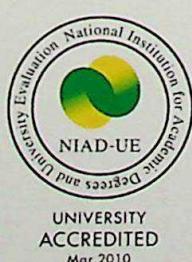
注:「非常勤役職員等給与」においては、寄附金、受託研究費その他競争的資金等により雇用される職員に係る費用及び人材派遣契約に係る費用等を含んでいるため、当法人の財務諸表附属明細書の「18 役員及び教職員の給与の明細」における非常勤の合計額と一致しない。

佐賀大学メールマガジン登録受付中!!

読んで役立つ情報満載!!!

登録は→ <http://www.saga-u.ac.jp/mailma/>

または 佐賀大学 メルマガ 検索



【表紙画制作者】文化教育学部教科教育 教授 栗山 裕至



本誌の特集は「学生支援の取組」についてです。今の大学生の悩みは深刻です。全国規模の調査を見ると、経済的なこと、人間関係などといった悩みも少なくないのですが、近年は就職に関連するものが最も多く、悩みの7割を占めています。また、学力差も広がっており、授業のレベルについていけないという悩みも増えています。本学ではこのような悩める学生をなんとかサポートしようと、専門スタッフや学習アドバイザー等が常駐し、対応しています。

一方で、佐賀県以外の国立大の教員から「最近、佐大は元気ですね」といわれることが増えて来ています。喜ばしいことです。オープンキャンパスの参加者数も、近隣の国立大が減っているのに対して、本学は増加傾向です。メディアも含め、佐大生の露出度が増えていることも確かです。毎号取り上げている「イキイキ佐大生」はその牽引役となっています。また今回取り上げた「佐賀大学xサガテレビ」共同企画も、今後、大きな露出の場となるものと期待しています。12月に放送された本学のテレビCMでのキャッチ・コピー「そのサガ、サガ大。」どおり、ひと味もふた味も違った学生をこれからも紹介していきたいと思っています。

(広報室長 早瀬 博範)



R 100
100th Anniversary
記念誌
2014

誌上ギャラリー

「音のない声」

(第97回佐賀美術協会展にて美術協会賞受賞)

まちださとこ
町田聰子(文化教育学部 美術・工芸課程 彫塑専攻3年)



【作者プロフィール】

- 1994年 長崎県生まれ
2012年 佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程入学
2014年 第97回佐賀美術協会展 美術協会賞
第59回長崎県美術展 県知事賞

【作者コメント】

言葉にすることの難しい感情や感覚のゆらぎをテーマに、日々制作しています。
本作は、心に浮かんでは音となることなく流れでゆく声をとらえたいと思い制作しました。

本学の情報をスマートフォンで見ることができます。簡単アクセスはQRコードをご利用下さい。

スマートフォン用 URL:<http://www.saga-u.ac.jp>

